○筑前切支丹石城問答小考

本田栄秀

切支丹問答即ち筑前国博多妙典寺における慶長八年（一六〇三）四月二十五日の、京妙覚寺僧唯心院日忠対イルマン旧沢の宗論の行われたことは宗門史上疑いを容れない事実として記録されている。たゞ惜しむべきは一、当時の古記録文書の残されていないこと、二には基督教側の問答記録が揃っていないため彼我両問答の比較考察をした上での客観的判断を為しえないことである。更に問答のテーマが仏法に関することのみで、当時切支丹問答の形式がこうであったと云えばそれまでであるが、所謂、基督教理への言及が全くみられない点、現代宗論批判とする者の場に立った感覚として意に満たないものを感じる。

そもそも慶長八年（一六〇三）、当時の博多は西国第一の都市として切支丹の宣教師たちは教会堂を建て伴天連、伊留満に布教せしめ、わずかに肥後の加藤清正が慶長五年（一六〇〇）以後ようやく切支丹に圧迫を加えはじめた時代で、徳川家康による切支丹禁止令は十年後の慶長十八年（一六一三）であった。このような時代に行われた所謂、切支丹石城問答（妙典寺先住不勉院日中上人命名）の概略は次の通りである。博多松林山妙典寺はもと筑後国柳川にあった。応永年間、本成院日円の開山で、その後第十八世戒光院日秀のとき開基檀越、立花増時が黒田藩に仕えるべく博多に移住するとともに、妙典寺も柳川より筑前国博多に移し堂宇を新たに建立することとなった。

慶長八年（一六〇三）四月廿五日はまさに落慶法要の日であって、京妙覚寺から下向した唯心院日忠が、当妙典寺を対決の場として法論を行うこととなった。この時切支丹の伊留満旧沢を始めとして彼徒約二百人が徒党を組んで妙典寺に押かけ、門を閉ざして日忠を殺害しようと謀ったのであった。ときに信徒の鳥井数馬亮吉重は藩邸でこれを聞き、直ちに手の者四十人あまりを率いて馳けつけ、日忠の高座を外護した。日忠は遂に伊留満を破り、国主長政はそ

の功を認めて今の勝立寺の寺地を与え、長政自ら、問答に勝ったことに因んで正法興隆山問答勝立寺と名ずけた。問答の要旨は次の通りであった。

伊留満旧沢云く。先日の説法で貴僧は妙法五字の妙を、善悪不二、邪正一如と説いておきながら、今日において邪正善悪の差別をたてることは、法華円融の妙理に対する自己矛盾ではないか。

日忠云く。善悪不二、邪正一如の妙諦は仏の悟りの境地に立ってはじめて云えることであって、われら凡夫は善悪邪正を差別し、善につき正に帰するのは当然である。善悪一体と云って毒を食べることが出来るか。

旧沢問うて云く。では釈尊の心法とわれら凡夫のこころは天と地が隔たるように別々であるのか、それとも一体なのか。

日忠云く。それは一体である。いわば釈尊の心法は明鏡であり、われら凡夫のそれは曇鏡であって、その相は異っても体は一である。故に凡夫の心を離れて仏の心を得ようとすれば、それは例えて云えば氷を離れて水を求めることである。

旧沢云く。三世（過、現、未）の心法はそれぞれ一体であるか別体であるのか。

日忠云く。一体である。

旧沢云く。それなら貴僧は過去においては人間か畜生か菩薩かそれとも仏なのか、未来ははたして何者なのか即答願いたい。自分にとっては心法は現在あるのみで、過去、未来を知らない。例せば雪が消え、灯が滅するようなものだ。

日忠云く。三世のこころが汝の云うように別体であり、汝が眠っている時と醒めているときのこころも別であると云うのなら、汝が眠っているとき汝の頸を刎ねるが宜しいか。

——旧沢閉口す。

日忠云く。要するに知らないから三世の心法は別であると云うのは当らない。汝すみやかに邪見を翻えして法華を証得すれば一念開解して十方三世を見わたすこと掌中の菓をさす如くであろう。

さて問答の当主たる日忠上人は万代亀鏡録によれば備前

の生れ、武門の誉れ高い斉藤家に育った。十九才の時父の仇討ちで関東に向い兵法を勉ぶ身となったが、偶々、法光院日吏の教化を受け、のち京妙覚寺僧として諸国を弘通行脚するうち筑前博多に至り切支丹の徒と上記の問答に及んだのであった。

日蓮宗年表（立正大学編）に元和六年（一六二〇）八月二十日筑前博多勝立寺唯心院日忠寂とあるのは、その実、日忠上人はこの日故あって寺を出奔して関東に下り、以後開山上人の石塔もなかったところ、十一世速成院日深（享保年間、一七〇〇年代）に至って日忠が寺を後にした日を命日として石塔を建立した由、勝立寺の伝承筆録がある。さきにのべた問答の原型もこのころ日深によって整えられ、漢文体に成文化された模様である。

この研究発表に当り、開山日忠上人の石塔を確認ずみであり、この五重石塔の裏はこの伝承の通り寂年は元和六年八月二十日と刻まれ、この史実を証明している。

関東出奔の仔細についても妙典寺先住日中上人の筆録によれば日忠の伯父に当る江州浪人斉藤又兵衛はおそらく日忠の功績によって国主黒田長政に召抱えられたまではよかったが、長政の意に背くことがおき、切腹を申付けられる結果となった。それに対し日忠は、ことの仔細は何であれ、肉親の伯父に対する長政の措置を心よからず思い、且つは世間体を考え出奔したであろうことは想像にかたくない。これについて九州大学名誉教授、長沼賢海氏はその著「日本宗教史の研究」において、「宗論の功によって寺地、寺号まで賜わったといわれるものが出家の身として在俗の親類のために、そのように憚る必要があったのであろうか。多少疑うべきものがある」旨述べられているが、出家、在家ともに人情に変りある筈がなく、賢海氏の意見はあまりに人の情を無視したもののようにも思われる。

なお賢海氏は同書を著わすに当って実地調査の折（昭和初期）、日忠上人の花押のある曼荼羅を発見され、日付が寛永十八年（一六四一）とあったことから、その頃まで日忠は博多にとゞまったことを主張されているが、それが日忠の直筆であれば一往問題となるが、今度の戦災で永久に焼けうせたもののようである。（註この伝日忠の本尊写真

を立正大学宮崎英修教授が御所蔵で、唯心院日忠の図顕でないと御鑑定の由、研究発表の折、御教示いたゞいた。）

亀鏡録によれば国主長政は日忠が宗論に勝ったことを聞いて大いに感じ、以来筑前の国には切支丹宣教師や教会堂は一掃されてしまったことになるが、事実は必ずしもそうではなくて、賢海氏の調査によれば、宗論後の慶長九、十年（一六〇四、五）の筑前の国には依然として教会堂があり、宣教師はむしろ一人増えているのであって、事実上の伴天連の追放と信者の弾圧は慶長十八年（一六一三）家康の切支丹禁止令以後のことであった。

最後にこの問答の内容が、まるで仏教徒間の宗論であるかのような感を与えることは妙典寺先住日中上人も指摘し、又この論のはじめに、現代人の感覚をもってみるとき基督教理への言及が全くないのは意に満たないことを述べたのであったが、この点に関してやはり賢海氏の調査を通じて再び考えるとき、結論的には一往納得出来るのである。即ち仏法をテーマとしての宗論は当時切支丹宗徒の常套手段であったので、云わば「切支丹が己の法門を持出さずに兵器を敵に求める主義」によったのであった。

つまり本問答の中心になっているのは妙法五字の妙の一字を説明するときの、仏凡一体、邪正一如の見方である。伊留満旧沢は法華円融無碍の妙理を基調とするなかに生仏をへだて、善悪邪正を区別することの一往の矛盾をついているのであって、問答の内容は単純であるが、仏法の本筋を通しているのである。更に本問答はかの安国論における主人と旅客との対話のように、結果としてみるとき所定の結論に落ち着くところの、いわば与党質問の匂いさえするのであって仏教の門外漢には出来にくい問答である。してみると問答の相手である伊留満旧沢なる人物はその名の通り、あるいは賢海氏の指摘のように南蛮人の伴天連ではなくて日本人出身の伊留満であり、仏教僧侶出身かそれに類似の者であったろう。

日本に渡来した切支丹の宣教師は外国伝道の要領を心得ていて、まず仏教の僧と接近しその実績をあげようとした。つまり僧侶の切支丹化である。ことに慶長前後大名の浮き沈みがはげしく、浪人の武士が多かったと同じく、諸寺諸

山は多く荘園領地をうばわれ、延暦寺、金剛峯寺、熊野三山、九州地方では英彦山等に浪人僧を出すこととなった。彼等は乞食坊主や虚無僧となって衣食を外に求めたが、その一部は自然の勢いとして伴天連に買収され、結果として彼等の宣教の手先となった事実が「南蛮伴天連いるまん同宿白状覚」等に伝えられている。

結論として云える一つのことは、慶長八年、妙典寺において世に石城問答と呼ばれる宗論が行われ、問答の主であった京妙覚寺僧日忠が国主長政から寺地を賜わり、勝立寺開山となったことは疑いを容れない事実である。たゞ日忠の晩年については不明であり、本問答以後は筑前の切支丹が一掃されたと云うほどの事件ではなく、局部的の出来ごとであって、全体として家康の禁止令まで切支丹宗門の繁栄をみたわけである。更に問答記録「邪正問答抄」が最も史実に近いものとするなら、伊留満旧沢は仏教僧侶出身であった可能性が強いと云うことにもなる。昭四三、一、十四

○ 参考文献

博多妙典寺先住不勉院日中上人筆録
博多妙典寺三十世究竟院日等上人筆録
「日本宗教史の研究」長沼賢海著
日蓮宗年表　日蓮宗史料編纂会編
石城志　津田元願編纂

「マンダラゲについて」

岡田栄照
立正大学　文学修士
中村学園女子高校教諭
立正大学仏教学会々員
身延山短期大学々会員
博多妙典寺副住職

法華経・序品に「曼陀羅　曼殊沙華を雨らし栴檀の香風は衆の心を悦可す」阿弥陀経に「かの仏国土は常に天楽をなし、黄金を地となす。昼夜六時に、曼陀羅華を雨らす」とあり、弘安四年十一月十五日附の上野殿御返事に「妙法蓮華経と申は蓮に譬られて候。天上には摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、此等はめでたき花なれども、此等の花をば